

『ボヴァリー夫人』に於ける時間構成の誤りについて

SUR LES ERREURS DE LA COMPOSITION DU TEMPS DANS “MADAME BOVARY”

修士課程 2年

玉 井 崇 夫
TAKAO TAMAI

医者に嫁いで行く娘を送って、ひとり帰途につくルオーは、自分の過去の日々を感傷に満ちて思い起こす。

《そして、ルオーは自分の結婚式のこと、昔の若かった頃のこと、妻の最初の妊娠のことなどを思い浮かべた。……それも皆な遠い昔のことだ。息子が生きていたら、もう30歳になっていよう》
(p. 26)

此処で初めて作者フローベールは、ルオーの長男の存在を明かす。この男児は「妻の最初の妊娠」と「もう30歳になっていよう」の二点から、エンマの兄に当たることが容易に推測される。この亡き息子について、やはりルオーの側からもう一度だけ述べられる。それはエンマの埋葬の後で、肉親に先立たれる不幸を嘆いて、次のように語っている。

—Ah! c'est la fin pour moi, voyez-vous! J'ai vu partir ma femme……, mon fils après…
…, et voila ma fille, aujourd'hui! (p. 315)

《ああ、これでわしもおしまいだよ。女房には先立たれ……、それから、せがれ……、そして今日は娘と》

原文から明確に読み取れるように、作者は3人の死期をここに順序立てて叙述している。「女房」、「せがれ」、「娘」の順である。この息子の死亡時期は、どこにも述べられていない。一方、「女房」の死については、ルオー、エンマはもとより、道案内の小僧の口からも作者は語らせている（第1部2章）。

《ルオーは昨晚、近所の家で『公現祭』のお祝いをした帰り、足の骨を折ってしまった。2年前に女房が亡くなった。家には「お嬢さん」がいるだけで、父親を助けて家事の切りもりをしている》
(p. 13)

ルオーが妻を亡くしたのは、「2年前」であることが明記されている。「せがれ」は「女房」の後に死亡している。息子はこの短い期間に母親の後を追うように死んだことになり、些か突飛な感じがしないでもない。が、あり得ないことではない。しかしながら、作為的な匂いのするこの現実を信じたとしても、1、2年前に死んだ兄の存在が、単に二度ルオーの側から語られるだけで、エンマの意識の内に何ら形跡が窺えない事実は理解しがたい。母親が亡くなった時には、ルオーが

「娘が病気になったと思って訪ねて来た」ほど悲しんでいる。シャルルも何度か母の思い出を聞かされていたようである。しかも、「2年」後の今も毎月一度は決まって墓参りに出かけるほどである。

《エンマは母のこと、墓地のことをまたシャルルに話した。そして、庭の花壇を指さして見せさせた。その花を摘んで、毎月第一金曜日には欠かさず母の墓に供えに行くのであった》(p.21)

しかるに、時間的には一層記憶に生々しいはずの兄の死について、エンマの回想は寸毫も見られない。兄の存在すらエンマの意識に無いようである。それは、兄妹の年齢がかなり離れているところから(草稿のひとつによると、フローベールはエンマが母を亡くした年齢を17歳に設定している。この時、兄の年齢は「30歳」の3年前のことであるから、27歳ということになる。後ほど述べるが、この兄の年齢には疑問がある。が、兎も角ふたりの年齢に開きがあることは間違いない。)、父親のルオーには色々と記憶に残っているが、幼い頃に死別したエンマには顔すら思い出せない人のイメージである。実際、ルオーの回想の場面(4章)でも、「せがれ」の面影は随分遠くから浮かんで来ている。

作者の「女房」と「せがれ」に対する処遇の不平等は、そのままボヴァリー夫人に占めるふたりの位置に反映している。母親はボヴァリー夫人の内で、兄は外で意味を持っている。エンマの宗教心は、実際の性格の反面に備え持った感傷的なロマンティズムに根差したものにすぎないものだが、母親の死は丁度トスト生活に於ける舞踏会の実体験と同じ具象化された現実像を、修道院の彼女に与える。しかし、兄の存在はボヴァリー夫人にとって、彼女のグレーハウンド犬ほどにも意味を持たない。母親の死はボヴァリー夫人の内部で消化されるが、兄の存在はその事実のみが作者にとって必要であればよかったのである。すると、作者フローベールは何故、蛇足とも思えるエンマの兄の存在をわざわざ持ち出して来たのか、しかも、何故錯覚を呼ぶ不自然な時間的位置に兄の死を設定したのであろうか。

《一切金財売り払うと、12フラン75サンチーム残った。この金はボヴァリー嬢が祖母のところへ行く旅費に使われた。祖母もその年に亡くなった。ルオー爺さんは中風なので、伯母が彼女を引き取った》(p.324)

母の自殺、父の頓死の後、遺児ベルトは祖母の許から「伯母」 tante に引き取られて行くことになる。tante は日本語の「おばさん」に当たる言葉であるが、その意味は日本の場合と異なり限定されたものである。両親の姉妹、両親の兄弟の妻だけしか示さない。ところが、作品ボヴァリー夫人を熟読してみても、「伯母」の实在を論拠だてる叙述は見当らない。ここに、エンマの兄の存在が大きく浮かび上って来る。この唯一の「伯母」は兄の妻に当たる人で、彼が27、8歳で亡くなる前に結婚した女性なのである。(多くの翻訳に見受けられる「叔母」は、この論点からして、「伯母」の誤りであろう。)

フローベールは、どうやらこの「伯母」の实在を位置付けるために、エンマの兄を伏線として設定したようである。ところが、困った問題がひとつある。それは彼の死亡時期である。最も自然と

思われるエンマの幼い頃、すなわち彼がまだ結婚年齢に達しない内に死亡させたのでは、「伯母」の実在が不可能となる。さりとて、ボヴァリー夫人に意味を持たない兄をいつまでも存在させておく訳にもいかない。

フローベールの多くの草稿から、ジャン・ボミエとガブリエル・ルルーが共編した新版『ボヴァリー夫人』の一章に、フローベールの興味深い混乱が認められる。嫁いで行く娘をヴァッソンヴィルまで見送った帰り、ルオーは追憶にふける。

《そして、ルオーは大きなため息をついた。自分の結婚式のことが頭に浮かんできた。23年前、自分もあんな風にして家に戻った。妻を馬のうしろに乗せ、雪の野を走った。クリスマスの頃で、野原はまっ白だった。……それは昔のことだ。あっと言う間にもう25年たった。長男が生きていたら、28歳になっているはずだから。》(p.175～p.176)

ここに見られるみつつの数字は、明らかに矛盾している。実際、ボミエとルルーは註を加え、

《この「23」、「25」、「28」の数字の連続を前にして、刊行者は読み間違いでないことを保証するのみである》

と、思案投首の体である。

フローベールが、このような歴然とした錯誤を無意識に犯してしまったとは思えない。物語の時間構成の上で、ルオーの結婚、それに続く「妻の最初の妊娠」、すなわち「長男」の年齢の設定を決しかねていたのではないだろうか。結婚を「23年前」とすれば、翌年子供が生れたとしても22歳で、息子の享年は19、20歳となる。「28歳」を採用すれば、25、6歳で亡くなったことになる。しかし、フローベールは結局、それらのいずれの数字でもない、「30歳」という新たな数字を決定した。すなわち、享年27、8歳である。「23」より「28」、「28」より「30」の方が、確かにエンマの兄が結婚後逝去したという事実、に、真実性が深まる。追っていえば、「伯母」の実在に説得力を増す。フローベールの苦肉の策であろう。しかし、このようなエンマの兄の存在は不自然な設定であり、その死亡時期に至っては非常に無理があると言える。

『ボヴァリー夫人』に窺われる時間構成は、極めて巧妙に組み立てられてある。内容的には30年余りの経緯の描かれている第1章に充てられたのが、たった9ページ〔註〕。エンマの埋葬後の記述も1章のみ、両方合わせても全体の6パーセントにも満たないページ数である。表題『ボヴァリー夫人』の示す如く、ほぼ全紙面がエンマの登場の9年間に割当てられている。しかも、死の前後1週間の場面が、その内の15パーセント強も占めている。エンマの死にかけられたこの大きな比重は、そのまま作品を象徴している。谷川のせせらぎが抗いがたい自然の法則を負って、川幅を増しながら河口に流れ行くように、ボヴァリー夫人の8年間の結婚生活は自づと死に向かって流れて行く。まさに、作者がシャルルの口を借りて言う「運命のせいです。」の台詞通りである。『ボヴァリー夫人』が死に到る生活の記録（フローベール自身は「伝記」という言葉を使っている）とすれば、この台詞は作品のひとつの結論でさえある。

この死に向かった物語の流れを損うことなく、と言うより、損わないために時の緩急が作品全般に巧妙に構築されている。《さて、3年振りに彼女に再会すると、情熱はまためざめた》(p. 215)と《2年の間、あなたはこの上もなく素晴らしく、心持ちよい夢の中にあたしを引き入れてくださった》(p. 290)というたったふたつの文章が無ければ、気付かない1年ばかりの時間的空白が、不自然なく織込まれている。それは、第2部11章の終りから同12章の最初の場面、イポリットに義足を贈る頃までに当たる。同様に、第3部のエンマとレオンの関係が1年間ではなく、2年間、もっと正確に推定すれば、1年6ヶ月から8ヶ月くらい続いていたことが、《2年前、エンマが病気だった時と同じように、／》(p. 268)、《いかにもロドルフは3年以来、男に持ち前の卑劣さから注意深く彼女を避けて来た》(p. 288)の記述によって、初めて解るようになっている。

フローベールはルイーゼ・コレに宛てた手紙で、時の構成について苦衷の程を「素材の配分」という言葉を使って語っている。

《やっと、前半部(第2部)を書き終えたばかりです。……思うに、この小説には大きな欠点があります。つまり、素材の配分の欠点です。……私を安心させてくれること(と言ってもまあまあなのですが)、それはこの作品が急変的な出来事の展開して行く物語というより、むしろ伝記であることです。劇的事件はほとんどありませんし、その劇的要素も作品全体の流れの中に溶けこんでしまうなら、おそらく読者は異なった局面の間に、調和の欠けていることに気付かないでしょう。それに、人生自体がいくぶんそのようなものだと思えるのです》(書簡; 1853年6月25—26日)

この手紙をアルベール・チボーデは次のように読んで、批評を加えている。

《ここでフローベールが用いている言葉は特徴的である。劇的事件とか劇的要素とかの言葉は、ほぼ構成という言葉の同意語としてあげられている。そして、小説はそれが芝居ではないという意味に於て、これらのものを取り除いてもいいのだろう。ところが、芝居は天恵ともいふべき瞬間や危機の瞬間を抽出し、持続しておくものであるから、最小限の時間内で最大限の効果を発揮させるように、こうした瞬間を構成し配分せざるを得ない。すなわち、芝居は時に支配されているが、一方、小説家は時を支配し、時を所有し、人生全体を時という布地にくるんで、ゆっくりと裁断して行くのである》(チボーデ; 『ギユスターブ・フローベール』 p. 94)

チボーデの言葉通り、フローベールは作品全体を「時という布地にくるんで」縦横無尽に「裁断」している。ところが、エンマの兄の死亡時期のように、「布地」の柄合せに苦心する余り、身頃の丈が取れなくなるようなことが起こる。フローベールの時間的な錯誤は他にも幾つか指摘される。エンマの死の後、ルオーのヨンヴィル到着をまず挙げることができる。いわば、これは見事に「裁断」され出来上がった着物に、気が付いてみると裏地を付け忘れた例であろう。

〔註〕 物語は「新入生」のシャルル・ボヴァリーが教室に入って来る場面から起筆されているが、この第1章ではシャルルの両親の結婚から彼のトストでの開業、先妻エロイーズとの結婚までが語られている。草稿によると、フローベールは2章に登場するシャルルの年齢を「33歳」に設定している。ちなみに、新入生のシャルルは「15歳」となっている。

エンマの死はボヴァリー老夫人もルオーもオメーの手紙によって報される。

《明け方、ボヴァリー老夫人が到着した。彼女は薬剤師の手紙で報されたのだった》（新版『ボヴァリー夫人』p. 618）

《ルオーが薬剤師の手紙を受け取ったのは、事件後36時間たってからだった》（p. 310）

この「事件」l'événement は、月曜日夜8時過ぎに発覚したエンマの自殺騒動を単に指すものではなく、服毒から死亡までの20時間ばかりの経緯全体を示している。従って、「事件後36時間たってから」とは、「事件」の顛末、すなわちエンマの死亡から1日半後ということになる。もし、「事件」を単に服毒発覚時に止めて解すると、「36時間」後は水曜日午前8時過ぎとなり、その後のルオーの行動に時間的な撞着が生じる。

エンマの死亡時刻が火曜日の昼過ぎであるから、薬剤師の手紙がルオーの手に渡ったのは、丸1日過ぎた翌日の夜半過ぎ（木曜日になっている）に当たる〔註〕。ルオーはこの報せで娘の不幸を初めて知るのであるが、事実、薬剤師はエンマの死後直ちに二通の手紙を認めている。

《オメーは手紙を二通書かねばならず、シャルルに鎮静剤を作ってやらねばならない。毒死の真相をくらす嘘を考えねばならないし、『灯火』紙のために、この事件を記事にまとめなければならない。おまけに、いろいろ聞き出そうと人々が待ちかまえている》（p. 303）

一通はボヴァリー老夫人に宛てたもので、彼女は早速に水曜日の明け方やって来ている。ルオーもまさに寝耳に水の如き報せに、取るものも取りあえず馬を駆立て、大急ぎでかけつける。夜半過ぎに家を出て、途中日の出を見ている。まだ起きやらぬ宿屋を叩きおこして、馬に餌を与え、再び鞭をくれる（en hélant les gens de l'auberge (p. 311) は「宿屋の人々」を起こすために「呼びかける」のである。tout en criant de loin pour réveiller les geas de l'auberge、新版『ボヴァリー夫人』p. 624）。キャンカンボワの村でコーヒーをあおって、また馬に乗る。そうして、ヨンヴィルに到着して喪の黒布を見ると、広場で卒倒してしまうのである。ヨンヴィル到着の時刻も作品の中から推定することができる。

「朝の4時頃」オメーは司祭ブルニジャンに、女中の用意しておいてくれた夜食を一杯やろうともちかける。そこで、司祭が「聖堂のおつとめに出かけて急いで帰って来た」後、飲み食いが始まる。そのあとで、葬儀の人夫たちがやって来る。「2時間」かかって、納棺が終る。弔問客がぼつぼつ集まって来る。ルオーの駆け着けて来たのはその頃で、葬式の始まる間際である。しかも、教会から墓地に向かう時刻が、まだ「朝」と言える午前中であるから、それ以前のルオーの到着は8時から10時の間に当たることが算定される。

《ちょうどこのような朝、患者を見舞ってから、その家を出て妻のところへ帰って来たことを、シャルルは思い出すのであった》（p. 313）

以上の事柄を時間的にもう一度並列してみると、火曜日昼過ぎオメーはエンマの死を手紙に認める。木曜日夜半過ぎ、ルオーはその手紙を受け取り、娘の不幸を知る。直ちに出立。朝8時から10

時頃到着。早速に葬儀が始まる。これが、作品から追った時の経過である。此処には一見、時間的な矛盾は無いように見える。しかし、承伏できない一点が、潜んでいる。ルオーが約6～8時間しかからなかったベルトとヨンヴィルの行程に、オメーの手紙を託された使いの者が、何故36時間近くもかかっているか。確かに、ルオーは「馬の腹帯から血がしたたる」ほど鞭をくれ、拍車をかけて疾走した。道筋も異なっていたかもしれない。だが、それにしても、この時間の甚だしい相違は納得できない。尤も、オメーが手紙を認めたのは確かにエンマの死亡直後であっても、使いの者に持たせたのはあとのことだとも考えられるが、もう1通の手紙によって、実際にボヴァリー老夫人は翌日の明け方に到着しているのである。（老夫人については、その往復の行程に時間的な矛盾はない。）エンマ服毒の際、イポリットとジュスタンをそれぞれカニヴェ医師、ラリヴィエール博士の許に大急ぎで手紙を持たせたオメーも、エンマの父親には特に慎重である。

《オメー氏は老人を悲しませないように、遠廻しな書き方をしておいたので、どういうことなのかわからなかった》（p. 310）

そつのないオメーの面目躍如たるものがある。しかし、この世故に長けた男が、もしかしたら娘の葬式に間に合わなかったかも知れないような、間の抜けた手配をするであろうか。

物語の盛上がりから、この場面のルオーの駆けつけ方は非常に効果的であるが、明らかにフローベールの時間構成の誤りである。

〔註〕 エンマの死亡時刻は、ラリヴィエール博士が「昼食」を取ってから、夕方「6時」までの間である。新版『ボヴァリー夫人』を見ると、《ルオー爺さんは、道すがら（4時間半駆けて来た15里のあいだ）馬に拍車を入れながら、覚束無い気持と焦燥で胸がはりさける思いだった》（p. 623）とある。その後、「日がのぼった」訳であるから、自宅を出発したのは、冬の陽の昇る少なくとも「4時間半」前である。零時を1時間ばかり過ぎた頃であろう。それが、エンマの死から36時間後であるから、エンマの死亡時刻は正后を幾らか過ぎた頃と算出される。実際、決定版の作品中でも、エンマが死んでから「6時」までに可成り時間の推移が窺える。

第1部3章の次の記述にも、フローベールの時間構成に錯誤が垣間見られる。

《シャルルはルオーの忠告に従った。ベルトに再びやって来た。彼はすべてのものを昨日のことに、すなわち5ヶ月前のように思い出した。梨の木にはもう花が咲き、ルオー爺さんはいまでは起きて動きまわっていた。そのことが、農場をいっそう活気づけていた》（p. 20）

シャルルが初めてベルト農場にやって来たのは、「公現際のお祝い」の翌日、つまり1月初旬である。その次の日から早速に彼のベルト通いが、「不意の訪問」を除いても「週に2回」続く。もともと単純骨折にすぎなかったルオーの怪我は、「順調に癒って、46日後には独り歩きを始める」ほどになる。患者はもとより農場の百姓たちまで、田舎医者「大した腕きき」だと、見る眼が違って来た。それに、若く美しい「お嬢さん」がいる。シャルルは自分でも何故か解らぬほど、ベルト通いがますます楽しくなった。

《シャルルは庭へ入って行く自分の姿を思い、肩先で柵の廻るのを感じるのがうれしかった。塀で鳴く牡鶏も、迎えに来る下男たちもうれしかった。穀物倉も厩もうれしかった。自分を恩人と呼

んで手を握ってくれるルオー爺さんもうれしかった。台所の洗った石畳を踏むエンマ嬢のかわいい木靴もうれしかった》(p.16)

前掲の3章の引用で、シャルルが再び見出す「すべてのもの」が、彼の動きを追って幾つかここに描かれている。決定版では削除されているが、新版『ボヴァリー夫人』には「何も変わっていない」ものが、やはりシャルルの視線の動きに従って逐一列挙されてある。そして、《一瞬、忘れている間に途切れていた過去の感覚が呼び覚まされ、いまや昔のことが今のことのよう思われ、記憶は新たな感動となるのであった》(p.163)と述べられている。

ところで、妻のエロイズの嫉妬から、シャルルはこの胸弾むベルト通いを中止せざるを得なくなった。此の時期は、医者ガルオーの治療に当たってから少なくとも「46日」以降のことであるから、2月中旬以後と算定される。すると、シャルルが再び「5ヶ月」振りに農場へやって来た月日は、7月中旬過ぎに当たり、春の内に花を咲かせ散らす「梨の木」に、「花が咲いて」いるはずはない。しかも、別所(9章)で、

《また春が来た。梨の花が咲くと、春さきの暖かさにエンマは息の詰まる思いがした》(p.59)と書いているフローベールが、梨の開花期を識らぬはずはなく、「もう」*déjà*の副詞の使用が、一層疑惑を深める。ただ、無理にも「5ヶ月前」をシャルルが初めてベルトにやって来た時点に据えて算出すると、この場面は6月初旬となり、それに、「もう」の副詞を妻の死後引き籠りがちだった男の自然を前にした心の発露と読めば、少なくとも数字の上では辛うじて辻褄を合わせることができる。しかし、この場面のシャルルの眼は、単に物理的な「途切れた」時間を測っているのではなく、「すべてのもの」に過去の感慨を重ねながら、再び「見出した」世界を追っているのである。「5ヶ月前」に体験的事実が前提となっていなければならない。

新版『ボヴァリー夫人』を見ると、フローベールはこの場面の時期を「4月初旬」に想定している。そして、「梨の木に花が咲いていた」(*déjà*の副詞は見られない)とある。此処には時間的な矛盾はない。一方、「5ヶ月前」の記述は全く同じで、シャルルが骨折治療のため農場へ来た時期が今度は前年の11月初旬となり、矛盾しそうに思えるが、新版にはそのベルト往診の時間的位置が明かされない。従って、この点も問題にならない。

こうして見ると、フローベールの初期の想案には、決定稿とは幾分異なった時点から、『ボヴァリー夫人』が出発したことが窺われて、面白い。が、他面、決定稿に至っては、余り時間標識を立てすぎて、却って混乱と矛盾を誘ったことは否めない。

ところで、これまで指摘して来たフローベールの時間構成の曖昧性あるいは錯誤は、いずれもボヴァリー夫人の外部で犯されている。いわば、物語の細部の誤りだといえなくもない。フローベールの言うボヴァリー夫人の「伝記」には、直接波及しない誤謬かもしれない。兄の死はボヴァリー夫人登場以前の問題であり、ルオーの到着は死後のことである。3章の件もシャルルが勝手に勘違いしたことである。

しかし、作者フローベールはボヴァリー夫人の或る時期にも、また同じ過ちを犯している。それ

は彼女の妊娠である。もはや、この「伝記」はその意味を失う。

エンマの妊娠が読者に初めて報されるのは、第1部の最後の一行である。それまでエンマあるいはシャルルの眼を通して描かれていた物語の中に、突然作者が顔を出し、天の啓示の如く妊娠の事実が告げられている。

《3月、トストを発つ時、ボヴァリー夫人は妊娠していた》(p. 64)

その後、物語の中に明確な位置を持って、エンマの妊娠が記されるのは第2部3章で、ヨンヴィルに転居して間もない頃である。シャルルは患者がやって来ないので、浮かぬ気持のまま無為な日々を送っていた。妻の持参金も底を尽き、金銭的な心配があった。そんな或る日のことである。

《もっとうれしい心配ごとが起こって、シャルルの気を紛らわせた。妻の妊娠である。臨月が近づくにつれて、彼はますます妻をかわいがった。新しい肉の絆ができ、いっそう複雑な結びつきを、いわば不断に感じることである》(p. 82)

《エンマは最初に大きな驚きを感じた。が、やがて母になるとはどんなことなのか識るために早く産んでしまいたい気持になった》(p. 82)

作者はシャルル、エンマそれぞれの側から、同時に以上の如く述懐させている。妊娠の事実が「うれしい心配」と「大きな驚き」と、夫婦の間で幾分違ったニアンスで迎えられる。

《立ち上がって妻を抱いたり、顔を撫でたり、母ちゃんと呼んだり、ダンスをさせようとしたり、心に浮かぶ限りの色々な優しい冗談を、半ば笑い半ば泣きながら言うのであった。子供をもうけたのだと思うと、うれしくてならなかった。これでもう何ひとつ不足はない。人生の全部がすっかり経験できたのだ。そこで、彼は晴れやかな気持で人生の食卓に両脇を突いたのである》(p. 82)

些か滑稽なほどの狂態であるが、妻の妊娠を知り、父親となるシャルルの喜びをアイロニカルな筆致でフローベールは描いている。

《しかし、エンマは思うように金を使うこともできず、ピンクの絹カーテンのついた舟型の揺籃や刺繍した布帽子を買うこともできないので、みじめな気持の内に手作りの支度を断念し、村の仕立屋に選り好みも掛合いもせず一度に注文してしまった。だから、世間の母親がよるこんでする赤ん坊の支度を楽しむこともなかった》(p. 82～p. 83)

しかし、エンマのこんな気持も、「シャルルが食事のたびに赤ん坊のことを話すので、やがてそのことをしきりに考えるように」変って来る。そこで、彼女は「ある日曜日」に生れるはずの女兒の出産を、皮肉にも「男の子」を夢見ながら待つのである。

この時期に妊娠が夫婦の間ではっきりしたとするならば、シャルルが医者であることも勘案して、妊娠2ヶ月前後であろう。すると、第1部で予示された妊娠の一行の記述は、受胎の頃、あるいはその暫く後のこととなり、作者だけが識っている事実として、小説構成の面から言えば伏線として、書添きえられたものと見ることができる。

ところで、出産の翌年(第2部6章)に、次のような文章がある。

《窓と手芸台の間にベルトがいて、毛編みの靴をはいてよちよちしながら、母親に近寄って、前掛けのリボンの端をつかもうとした。「うるさい！」エレンは手で払いのけながら言った。

娘はやがて、なお近く母親の膝のところへやって来た。そして、両腕で彼女の膝にすがりながら、大きな青い眼でじっと見上げた。透きとおった涎がひとすじ唇から前掛けの絹地の 上 に 流 れ た。

「うるさい！」エンマは苛立たし気に繰り返した。

その顔におびえて、子供は泣きだした》(p. 107～p. 108)

赤ん坊は既に「よちよち歩き」をしている。生後10ヶ月から1歳くらいの幼児である。この場面の時期は、その冒頭部の文章《4月の初めで、桜草が咲いていた》(p. 103) から解る通り、4月初旬である。すると、ベルトの誕生は前年の4月から6月の間に当ることが算定される。亦、別の箇所からも確認することができる。それは同3章《ある日、エンマは指物屋の女房の所へ里子に出している娘に、急に会いたくなった。そこで、産後6週間の物忌がすんだかどうか暦で確かめもせず、ローレの家へ出かけて行った》(p. 85)である。此処の場面には明確な時間的な示唆は表わされていないが、風景描写の幾つかの文章によって、季節が夏であることが推測できる。そして、「産後6週間の物忌がすんだかどうか暦で確かめもせず」と、作者は曖昧に量しているが、実際に「産後6週間」頃のことである。と言うのは、赤ん坊の誕生祝いが行なわれたのちも、「老ボヴァリー氏はそれから1ヶ月ヨンヴィルに滞在」している訳で、エンマがローレの家を訪ねるのは、その後の「ある日」だからである。これを逆算すると、エンマの出産は5月中旬から7月中旬の間に当たる。

一方、新版『ボヴァリー夫人』を見ると、この点についてフローベールはもっと明確な記述をしていたことが窺われる。

《それに、もっと楽しい心配ごとが起こってシャルルの気持を紛らわせた。6月の初めに出産するはずの妻の妊娠である》(p. 264)

エンマの分娩時期を6月初旬に設定している。ヨンヴィルに転居して来るのが3月下旬であるから〔註〕、28日を1月とする日本の妊娠月で数えると、7ヶ月末にかかり、そろそろ8ヶ月に入ろうとしている勘定になる。すると、第2部3章で妊娠の事実初めて接したように描かれている夫婦の態度を、作者はどう説明するのであろうか。しかも、ボヴァリー夫人はヨンヴィルの登場人物の前に、大きなお腹を突き出して馬車から降りて来ている訳で、その夜、二十歳の青年レオンと青臭い会話を交わすエンマの姿は、非常に滑稽なものになる(第2部3章)。

《このようにして住居が変わると、ボヴァリー夫人は最初の子供を身籠った。そしてまた、これが彼女のたったひとりの子供であり、生まれたのは女の子だった》(サント・ブーブ;『ボヴァリー夫人』p. 174)

サント・ブーブは彼女がヨンヴィルに移転してから後に、やっと懐妊したように書いてあるが、これは些か乱暴な読み方である。しかし、少くともヨンヴィルに移ってから、夫婦が初めて妊娠の

事実に気付くようには読める。あながち、この評論家の誤読を咎めることはできまい。

フローベールがこの3章を書くほぼ10ヶ月前に、ルイーゼ・コレに宛てた手紙には、次のようなことが語られている。

《今夜、若い娘の夢想を頭に浮かぶままに書きなぐってみました。まだ2週間はこの夢想の蒼き湖を航行しなければなりません。その後、舞踏会へ行き、それから妊娠によって終結する雨の多い冬を過ごす段取りになるでしょう。それで、この小説の三分の一がほぼできあがる訳です》（書簡；1852年3月27日）

此処にも見られるように、作者はエンマの妊娠を冬の終りに想定している。ただ、決定版では、ヴォビエサールの舞踏会の後もう1年の経過を置いて転居が行なわれ（すなわち、1年5、6ヶ月後）、その場面の末尾で妊娠の事実が明かされているが、この手紙で見る限り、フローベールはすぐその年の冬にエンマの妊娠を予定している。

亦、新版『ボヴァリー夫人』の第1部の最後の文章は《5月、トストを発つ時、ボヴァリー夫人は妊娠していた》（p.237）で終わっている。決定版の「3月」が、此処では「5月」になっている。この「5月」には刊行者が註を付けて、次のように指摘している。

《決定稿に見られる「3月」は、「5月」と書かれた字の上に書き改められてある》

もし、5月ならば、彼女は臨月にヨンヴィルに移転して来たことになり、臨月の引越しはいかにも無理がある。その他、「復活祭の頃」とか「復活祭のあと」とか、幾つかの草稿には懸案の跡が見られるようである。

こうして見ると、フローベールは一応気には掛けているようで、その心算で読み直して見ると、頷けない箇所が無くもない。

《エンマは気むずかしく、気紛れになった。自分のために料理をつくらせ、ちっとも手をつけない。ある日、牛乳ばかり飲んだかと思うと、翌日は12杯も紅茶を飲むのだった》（p.62）

《それから、エンマは痩せるために酢を飲み、空咳をし、すっかり食欲を失った》（p.63）

いずれも転居前のエンマの様子である（9章）。これらの文章が、作者の側からではなく、シャルルの眼を通して描かれたものとする、本当は「気むずかしく、気紛れになった」のでも、「痩せるために」酢を飲んでいるのでもない。妊娠症状の昂じた現象と理解できなくもない。それに、転居の際、乳母が伴って来ている。もし妊娠初期ならば、わざわざトストから一緒に乳母まで連れて来るはずはなかろう。こうして見ると、作者フローベールは、エンマの出産をはっきり「6月の初め」に想定して書いているようにも思える。すると、受胎時期は前年の9月初旬に当たり、彼女がヴォビエサールから舞踏会の招待状が来るのを、千秋の思いで待ち焦れている頃である。

しかし、一方、手紙や草稿からも窺われる通り、フローベールが「妊娠」を冬の終りから春の初めにかけて想定していることも事実で、「出産」との時間的關係にはやはり疑問を残している。この混乱が結局、問題の瞬目な3章の描写につながり、ひいてはサント・ブーブの誤読を誘ったことにもなる。実際、フローベールの作品に組まれた時の構成は、作品の現実よりも複雑で、曖昧であ

る。例えば、エンマがロドルフに駈落の決心を哀願する場面（第2部12章）である。

《「もう4年間も辛抱して、苦しんできたのよ……。あたしたちのような恋なら、神さまの前で告白したっていいんだもの。あの人たちはあたしをいじめようとしている。もうがまんできない。助けてちょうだい。」

エンマはロドルフにすがりついた》（p.180～p.181）

この文章を読んで、「4年間」とは不本意な夫との結婚生活を指しているように思えよう。あるいは、人妻の道ならぬ関係を言っているようにも思えよう。ところが、実際はそのいずれでもなく、ヨンヴィルに来てからの時間を示している。エンマの転居の希求は、単に現在の取巻かれた環境からの超脱ではなく、「幸福を生む場所」、すなわち「恋愛」のために「あらかじめ用意された土地」への旅立ちであった。そんなエンマにとって、「未来は真暗な一本の廊下で、その奥には扉がびったり閉されている」トストと違って、ヨンヴィルは「何かが起こり得る機会」を期待できる「土地」でなければならなかった。彼女は待った。そして、「もう4年間も辛抱して、苦しんできた」と言いたい訳である。尤も、姑の仕打ちに泣いて、そのことをロドルフに「事実を誇張して、いっぱい作り話をつけて」語った後の会話だけに、この彼女の言葉もまともに聴けない憾も無いが、しかし、女の戯言だけではすませぬところである。

このように、物語の背景に流れる実際の時間と、物語の現実との間に、微妙な誤差が含まれている。フローベールは実証的な科学精神を持つ反面、極めてロマンチックな性情をその根底に宿している。それは、『ボヴァリー夫人』が文学史に占める位置にも象徴されている訳で、一方、作品内部に於いてもその傾向は顕著に現われている。客観的な手法にもかかわらず、抒情的な描写が氾濫している如く、時間構成の上からもフローベールのこの相反性が浮彫りにされたものであろう。

こうしてみると、フローベールの言葉は意味深い響をもって聞えて来る。

《『ボヴァリー夫人』には、劇的事件はほとんどありませんし、その劇的要素も作品全体の流れの中に溶けこんでしまうなら、おそらく読者は異なった局面の間に、調和の欠けていることに気付かないでしょう。それに、人生自体がいくぶんそのようなものだと思えるのです。衝撃が一分しか続かないのに、実はそれが数ヶ月にわたって待ち望まれていたものだということだってあります。我々の情熱は火山のようなものです。いつも鳴動しているが、噴火は間歇的にしか起こりません》（書簡；前掲に同じ p.247～p.248）

〔註〕 2月下旬ルオーがやって来て、3日間トストに逗留している。それから、シャルが転居を本気で考えるようになるまでに、数日の経過が文章から読み取れる。転居を決心してから、ルーアンの旧師の許にエンマを連れて行ったり、引越し先きを「あちこち捜し」たりしている。その後、ヨンヴィルの薬剤師に手紙で土地の様子を問い合わせ、かなり日数が過ぎていると思われる。もう既に3月に入っていると考えられる。しかる後に、「エンマの健康がよくならなければ、春ごろに移転しょうと心に決めた」訳であるから、3月下旬の頃と推定される。

使 用 図 書

G. Flaubert: Madame Bovary; Garnier 1961
: Correspondance 3^esérie; Conard 1927

参 考 図 書

J. Pommier et G. Leleu: Madame Bovary, Nouvelle Version Précédée Des Scénarios Inédits; Jose Corti 1949
A. Thibaudet: Gustave Flaubert; Gallimard 1935
Sainte-Beuve: Les Grands Ecrivains Français, XIX Siècle Les Romanciers II; Garnier 1927
Nouveau Larousse Agricole; Larousse 1952
Encyclopédie Familiale Larousse; Larousse 1951

(紙面の都合で原文の引用は全て割愛した)

————— 1972年10月17日 —————